

能楽技法研究会のこと

羽田 昶

私が東京国立文化財研究所芸能部に勤務したのは、一九七六年（昭和五一）四月から二〇〇〇年（平成十二）三月までの二十四年間であった。その直前、非常勤調査員であった一年間を足すと、ちょうど四半世紀、三十五歳から六〇歳までということになる。これがまた、あつという間。「少年」ではなかつたけれども、まさに「老い易く学成り難」い年月でしたねえ。……ま、そんな感慨にふけてもしかたがない。能楽技法研究会のことを、思い出話ふうに綴ってみる。

能楽技法研究会発足の経緯や趣旨については、『能の囃子事』（一九九〇 音楽之友社）の解題で小林貢氏がくわしく書いて下さっているので繰り返さないが、要するに、当時音楽舞踊研究室長だった横道萬里雄先生が、十数名の会員（生徒）対象に、能楽技法の実際面（謡、囃子、所作の実技）を教授し、その構造を把握すべく講義し、三年間かけて指導して下さった研究会である。一

部では、わかりやすく横道塾と通称（われわれ生徒は必ずしもそういう呼ばれ方を好んだわけではないが）されていた。

一九六七年（昭和四二）の手帳を見ると、五月十日（水）の欄に「四時 文化財研究所」と書いてある。

たまたまその年の、日付は覚えていないが、四月だったと思う。私は、当時取っていた毎日新聞の夕刊に、東京国立文化財研究所芸能部のことが大きく載つたのを読んでいた。国立の機関なのに、こんなにも狭くて汚い建物で日本の伝統芸能が研究されているのだと、写真入りで、芸能部に同情的な、そして文化芸術行政に対して批判的な記事だった。「ああ、ここなのか」と思ったのを覚えてる。

何が「ここなのか」というと、一九六七年五月十日の午後四時、私はその木造平屋建ての芸能部を初めて訪れたのである。その日、能楽技法研究会最初の集いがあり、横道先生が全体的なご説明、講義方針をお話しになり、われわれは自己紹介をし、次週十七日から授業が始まったのだった。

*

どういう教えを受けたか、ほんの一端を紹介しよう。

授業は毎週水曜日、午後四時から九時まで。これは三年間コンスタントに続いた。最初のうち、四時から六時までの二時間は、観世・宝生・喜多三流の「田村」の謡本をテキストに、実際に謡を謡いながら（正確に言えば、先生がまず謡い、われわれにも謡わせながら）、旋律と拍子について、各流の記譜法について、そして小段構成と能本の劇構造について受講することから始まった。拍子合ワズのところを、生徒の中から北川久美子さん（現在の小寺佐七夫人）に謡わせて先生がアシラうというようなこともあった。北川さんの観世寿夫さんそっくりの凛と張った謡いぶりにびびくりした。六時から七時までは食事をして休憩、昼休みならぬ夕休みである。そして七時から九時までの二時間は、太鼓の稽古。もちろん道具を使うわけではない。拍子盤もない。両手で自分の膝を打ちながら「ツクツクツクツ、ヤ、ツク、ツ、ハ、ツ、ハ、トツタン」と、まずはキザミを覚えることに始まり、やがて、所定の手配りを覚え進み、先生が「吉野天人」

を謡いながら、われわれは出端・ノリ地・中ノ舞・ノリ地の太鼓を繰り返し打ったりした。

のちには前半の二時間が実技、後半二時間が講義になったような気がする。講義といっても地拍子などは、当然、実技をまじえることになったし、『豊高日記』のよう技法、演出を論じている伝書を読む場合は、叙述の内容を実際に謡ったり打ったりして追体験することが「読む」ことなのだ。面・装束の各説、扮装類型と囃子事との相関関係を懇切に教えていただいたのなどは、純粹な講義の部類だ。実技は、謡・謡事、囃子・囃子事を、次々に謡ったり囃したりしていった。謡事は、いろいろな曲からクセとロンギと中ノリ地を抜き出して説明すること、囃子事は神楽の構造を理解することが手始めだった。授業中のテキストには「喜多流囃子仕舞手附」全五巻を使うことが多かった。太鼓は、もちろん、右手で左掌を、小鼓は右手で左手の甲を打つのである。ある夏の日、みんな一斉に太鼓の稽古をしているとき、私の打つツツケの間に藪蚊が飛び込んで死んだことがあって、多くの生徒はそれを目撃して笑ったが、先生はお

気づきにならず怪訝なお顔をされた。そういう建物だったのである。

夏休み、冬休み、春休みの期間は、毎週の授業も休みになったが、そのかわりに合宿ないし集中講義があつて、朝から晩まで、みっちり授業をしていただいた。最初の年の夏は、八月下旬に河口湖畔で（どういう施設だったか忘れたが）、三泊四日の合宿をした。構工と運びや所作の稽古は、宿舎の廊下を使って行われた。このほかに、靖国神社社務所、農林年金会館、藤舞台等々で集中講義があつた。河口湖の合宿には先生のご一家も参加なさつた。夕飯後に連想ゲームをしてくつろいだとき、まだ九歳の蘭ちゃんが歌舞伎に精通していること、その博識ぶりに、みんなびつくりしたことがある。

*

『東京国立文化財研究所二十年のあゆみ』（一九七三年三月発行）には、「音楽舞踊研究室が中心となつて、所外の若手の芸能研究者にも呼び掛け、所内六名、所外十四名で昭和四十二年に『能楽技法研究会』を結成した」とある。名前は書いてないから、私が思い出すことにす

る。「所内六名」とは横道先生も含めてだろうが、それにもおかししい。五名のはずである。先生のほかに佐藤道子・前嶋（中村）茂子・宮本瑞夫・阿部（大谷）順子の四氏であつた。たぶん、この冊子が作られたとき調査員で在籍していた松本雍さんをもカウントしてしまつたものだろう。所外から応募し馳せ参じた生徒は、五十嵐はるみ・上原陽子・蒲生郷昭・北川（小寺）久美子・吉川周平・金田一（蒲生）美津子・小柴はるみ・滝沢奈津江・竹大（遠藤）由宇子・田中千鶴子・西野春雄・羽田昶・稗田礼子・松本雍の各氏一四名であり、加えて別格で増田正造さんが、「三十五歳未満」という条件に抵触しながら、先生と生徒の中間的な存在として、初年度は参加されていた。つまり「所内五名、所外十五名」であり、これで数字が合う。のちに荻原達子さんが、オペラーのように通つてこられた一時期があつた。

このうち、インド音楽の研究者だった上原陽子さんは、発足後まもなくお亡くなりになつた。所外からの会員は、私より三つ年上の蒲生郷昭さんが最年長、まだ学部学生だった北川久美子さん（東京芸大）と田中千鶴子さん

(武蔵野女子大)が最年少だった。

また、宮本瑞夫・大谷順子・五十嵐はるみ(たしか劇団四季の制作部門にお勤め)・吉川周平・滝沢奈津江(共立女子大助手で壬生狂言を研究されていた)の五氏は、中退のかたちで、最後まではいなかった。三年後、終了時(東条会館のグリルで打ち上げをした)の会員は、佐藤道子・蒲生郷昭・羽田昶・中村茂子・蒲生美津子・小柴はるみ・遠藤由宇子・西野春雄・松本雍・稗田礼子・小寺久美子・田中千鶴子の十二名だった。前記『二十年のあゆみ』に「終了時の参加者は所内四名、所外九名」とあり、先生を数えて、これは正しい。その後(ずっと後だが)、月曜会や能楽鑑賞の会でわれわれの仲間だった遠藤由宇子さんは急逝し、田中千鶴子さんは共立女子大大学院に進み、月曜会にも所属していたが、家庭に入られた。

*

研究会発足の当時、私は二十七歳で、開成高等学校の国語科教諭だった。妻の勤務先、能楽書林の丸岡大二氏からの情報で研究会のことを知ったのだった。実技の経

験は、学生時代に観世流の謡を習ったのと、ふとした縁で習わぬ経を読むように和泉流狂言をかじっていただけ。観能歴は十年足らず。もちろん横道先生のこととは、遠くから仰ぎ見て、存じ上げていた。大学に入ったころから、染井能楽堂での囃子科協議会能や、関東観世流学生能楽連盟主催の鑑賞能、その他の集いでの講演、テレビ「日本の芸能」の解説等々を拝聴していた。日本文学専攻の学生であり国語教師だったから、もちろん大系本『謡曲集』上が一九六〇年に、下が六三年に出たとき、買って持ってはいた。しかし、好きで能・狂言、歌舞伎を見歩き、独り漫然と勉強(?)していただけだったので、間近で横道先生からお教えを受けるに及んで、自分が今までいかに何も知らずに過ごしていたのかを、いやというほど(という言葉はこういうときに使うんでしょうね)思い知らされた。

横道先生の人並みはずれて該博な知識、見識、豊かなご経験、広くで深い蓄積は、今さら言うまでもない。驚くべき分析と整理と命名の魔力についても、そうだ。それにしても、授業中の先生の迫力と熱意はおそるべきも

のであった。これは、直接お教えを受けた者しかわからない。若かったのに、われわれ不肖の弟子の不甲斐なきを、申し訳なく思う。誰も知るとおり、先生はあれだけノートをとり、客観的かつ冷静に分析されながら、しかも充分に舞台を楽しみ、また批評的に見ていらつしやるのである。ある時ふと「要するに、能はどうして美しいのかってことだよ」とおっしゃったのを覚えてい

*

さて、三年を経て研究会は終了したが、その年すなわち一九七〇年の夏、今度はノートを整理し一本にまとめようと、われわれから先生にお願いして研究会を再開させた。その間の経緯も小林責氏の解題のとおりである。しかし、本にまとめようなど、よくも「ものを心安そうに」思ったものである。『能の囃子事』の冒頭にも書いたが、一時は、「謡」「囃子」「所作」「謡事」「囃子事」「間狂言」「舞台」「能道具」「作能法」「演出法」「小書」「式三番」「能の歴史と現状」「舞台上のきまりごと」というような章立てを考えた。そして、班を編成して各章を分担執筆するという計画で、各班ごとに調べた結果を

青焼きで、発表しては直し、発表しては直しを繰り返す日々が続いた。

結局、囃子事にしほつて一冊にすることに構想を練り直し、そうなるからも年月を重ね、「能の囃子事」が出たのが一九九〇年五月である。「限りなく遠くも来にけるかな」であった。執筆者のうち、横道先生は東京国立文化財研究所名誉研究員、蒲生郷昭・松本雍氏と私は研究所員であり、当初は佐藤道子氏も進行役で会をリードして下さっていた。研究、執筆、編集の作業を夕刻から行う芸能部に、蒲生美津子・西野春雄氏も参集されたのである。だから、『能の囃子事』は東洋音楽学会の編書であり音楽之友社の発行ではあるけれど、如上の経緯からして、芸能部の果たした仕事に数えられるべきものである。

能楽技法研究会は、今はもう解散した形になっている。しかし、われわれの人生に決定的な指針を与えてくれたものとして、横道先生への敬愛の念とともに、いつまでも心の中に生き続けている。